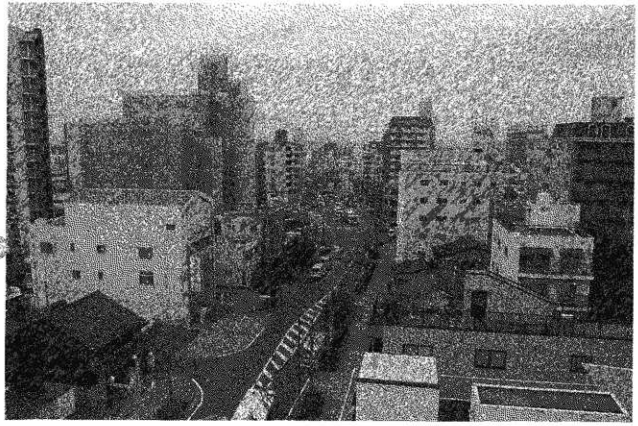
尾張元興寺跡第13次発掘調査報告書



2 0 0 9

名古屋市教育委員会

例　言

1、本書は、名古屋市中区正木４丁目1007番の一部で実施した尾張元興寺跡第13次発掘調査の報告書である。

2、調査は倉庫建築工事に伴って実施し、対象面積は65㎡、期間は平成20年４月７日から同年５月２日である。

3、調査に関わる調整事務は、名古屋市教育委員会文化財保護室学芸員伊藤正人が担当し、発掘調査を実施した名古屋市見晴台考古資料館の担当者は、学芸員竹内宁哲、市澤泰峰である。本書は、同編学芸員服部哲也、伊藤厚史、村木誠、樋縄茂の協力を得て市澤が執筆した。

4、調査の記録や遺物の整理作業は、調査担当者のほか、伊東亜紀、江田仁実、小川敦子、加賀貴巳子、角脇山香梨、佐々木佳子、鈴木智里、蜂須賀敦子、樋上佐知子、山本雅代、米倉由佳が行った。

5、本書で示す方位、座標は国土座標第Ⅶ系（世界測地系）、水準値は東京湾平均海水面（T.P.）である。

6、調査の記録、出土遺物等は名古屋市見晴台考古資料館が保管している。

7、発掘調査にあたり、下記の方々にご協力を賜りました。記して感謝申し上げます。

株式会社杉本組

目　次

Ⅰ　尾張元興寺跡の位置　1

Ⅱ　周辺の遺跡と歴史的環境　1

Ⅲ　尾張元興寺跡の概要と既往の調査　2

Ⅳ　調査に至る経緯と調査の経過　3

ⅰ　調査に至る経緯

ⅱ　調査の経過

Ⅴ　調査の成果　4

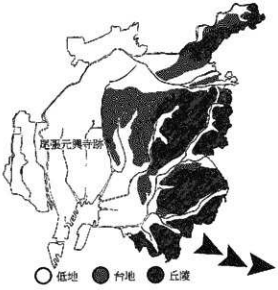
ⅰ　基本層序

ⅱ　遺構と遺物

Ⅵ　小結　14

報告書抄録は裏表紙に掲載

表紙写真：調査地点付近より佐屋街道を西に望む



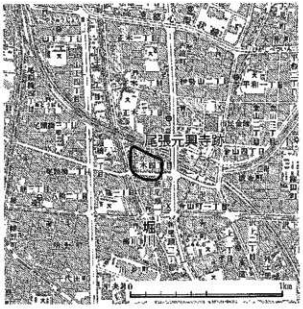


図１　尾張元興寺跡の位置

Ⅰ　尾張元興寺跡の位置

現在の名古屋市域の中心部は南北に長い半島状の、熱田層からなる台地上に位置している。この熱田台地は、北は名古屋城付近から南は熱田神宮付近までの南北15km程度、東西は広いところで３km程度の細長い台地である。熱田台地の西側は波蝕されており、東側から西側に向かって緩やかに傾斜をしている。また、北側から南側に向かっても傾斜している。この熱田台地の西側の縁辺には海岸線が近くまできていた時期があったと考えられており、近世前半においても熱田神宮の門前は海に面していたようである。

尾張元興寺跡はこの熱田台地の中ほど西側に位置しており、遺跡範囲は東西約200m、南北約180mで、標高は７～10mほどである。遺跡のすぐ西側は堀川に向かって急角度で傾斜し、遺跡の中央部には東西に近世の佐屋街道が走っている。遺跡の北側には正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡が分布しているが、尾張元興寺跡との間にはJR線や名鉄線が通り金山総合駅を挟んで谷状に分断されている。しかし、これは明治時代にJR東海道本線を敷設するための工事によって切り通されたものであり、もともとは北側の台地とつながっていた。東側と南側へは比較的平坦な面が続いており、東古渡町遺跡や金山北遺跡、高蔵遺跡などが分布している。

Ⅱ　周辺の遺跡と歴史的環境

尾張元興寺跡の南側には熱田台地に沿って、１kmほどのところに高蔵遺跡が位置し、その他にも東海地方で最大の前方後円墳である断夫山古墳や白鳥古墳、熱田神宮などが位置している。

北側には正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡が位置する。これまでの調査で両遺跡には５世紀に鉄鏃や陶式系土器、初期須恵器を持つ集落があり、古墳時代ないしは奈良時代とされる総柱の大型掘立柱建物址は、愛智郡の役所に関係するものと考えられている。また、「黒見田」の刻書のあるものや羊形硯片などの古代の須恵器の出土量も多い遺跡である。

東側には金山北遺跡や東古渡町遺跡がある。金山北遺跡では弥生時代には方形周溝墓がつくられるが、古墳時代以降、住居址や建物址が多く確認されている。東古渡町遺跡においては古墳時代まで墓域であったようであり、金山北遺跡にやや遅れて古代以降に住居址などが確認されるようになる。

尾張元興寺跡でも古墳時代の住居址や溝が確認をされており、北側の正木町遺跡や伊勢山中学校遺跡、東側の金山

図２　尾張元興寺跡周辺の遺跡（Ｓ＝１／50000）

北遺跡や東古渡町遺跡、古沢町遺跡などを含めた中で遺構などの変化を見ていくことが必要であろう。

Ⅲ　尾張元興寺跡の概要と既往の調査

考古学的な成果からは尾張元興寺の創建は７世紀中頃と考えられている。文献史料では『日本紀略』の元慶八年（884）八月二十六日甲寅の条に「勅令して尾張国愛智郡定額願興寺を国分金光明寺となす。本金光明寺災火焼損縁なり」とあり、この中の「尾張国愛智郡定額願興寺」が当寺院址である尾張元興寺であると考えられている。創建については、『日本霊異記』の説話に登場する道場法師が、国に帰って建てたとする言い伝えが残されている。

「願興寺」は10世紀頃になると衰退し、13世紀前半頃に再興されるようであるが、その後再び荒廃しているようである。現在、遺跡範囲内には泰雲寺と元興寺という二つの寺院が存在する。泰雲寺は寛文九年（1669）に立田村から移転された瑞光山大応寺が泰雲寺となったものであり、元興寺は享保三年（1718）に知恩院の末寺国豊山元興寺として建てられたもので、近世以前の記録に残されている寺院とは直接につながるものではないと考えられる。一方、1.5km ほど南西の中川区牛立町に位置する願興寺は当地から戦国期に移転したという沿革を持つ。

表１　尾張元興寺跡における既往の調査成果

		縄文	弥生	古墳	古代
分布地点	遺物			[illegible]	瓦
１次調査	遺構				
	遺物			須恵器、土師器	瓦、緑釉陶器、土師器、灰釉陶器
２次調査	遺構			SD01（古墳・飛鳥、奈良、平安（瓦含まず））	SK01（瓦だまり）
	遺物			須恵器（７世紀前半代、H60型式）、土師器、土錘	瓦、鴟尾、須恵器、土師器、灰釉陶器（K－14号窯式～K－90号窯式（10世紀前半））、軒丸瓦（K－14号窯式）
３次調査	遺構				
	遺物			須恵器、土師器	瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器
４次調査	遺構				SX01・02・04・05（瓦だまり、須恵器、土師器を含む）
	遺物			須恵器、土師器、円筒埴輪	瓦、須恵器、土師器
５次調査	遺構			SZ01・06	SX01
	遺物		弥生土器	土師器、須恵器	瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器
６次調査	遺構			SD02（溝）、遺構、小土坑	SX01（瓦溜めか）、小土坑
	遺物	縄文土器	弥生土器	須恵器、土師器、埴輪	瓦、須恵器、土師器
７次調査	遺構	ピット10数基（古代瓦含まない）、調査区北東部に集中する傾向			大型瓦を含むまとまり中心、調査区北東部に広がる SK11（古代末期の瓦溜か、瓦片大きく、２次的移動少ないか。下層には古代瓦はほとんど含まれない。古代の須恵器・土師器。 SK14（瓦堆積土坑、瓦だまりの中で最も新しい時期。瓦片には古代瓦が大半。瓦片小さく２次的移動の可能性。[illegible]６点、古代の山茶碗・土師器皿か） SK17・21（SK14に切られる。下層は古代瓦ばかり。[illegible]）攪乱（SK17[illegible]に食い込む、[illegible]）
	遺物	晩期縄文土器	弥生・古墳時代か	土師器、移動式カマド	緑釉陶器、灰釉陶器、瓦
８次調査	遺構	貝層１、SK09	SK09	SB01（竪穴、弥生、土坑穴（P4・48・66・150）、約4.5m方形）SK10、SK11、P8、P42、P61、P22、P52、P140、P166、柱穴１～３	SK01、SK02、SX08、SK09（調査区北側に集中）
	遺物	縄文土器（貝層１、SK09）	弥生土器（SK09）	須恵器、土師器、[illegible]、石製模造品[illegible]	瓦、灰釉陶器
９次調査	遺構			SX01（溝状遺構、下層は瓦を含まない）	SX03
	遺物		弥生土器	須恵器、土師器	瓦
10次調査	遺構			SZ01（５世紀後半、[illegible]、主体部P20、P10）	SK21、SK23、SK7、SK30、SB01、SB02、SX01、SB04、SB06、SK20
	遺物		弥生土器	須恵器、土師器、[illegible]	瓦、須恵器、土師器、灰釉陶器、[illegible]円面硯
11次調査	遺構		SK45（SK47）（方形周溝墓となる可能性）、SK48、SK50		
	遺物		パレススタイル土器（[illegible]）		瓦、須恵器、灰釉陶器
12次調査	遺構				
	遺物	縄文土器	弥生土器	円筒埴輪（５世紀）、須恵器、土師器	瓦、土師器、須恵器・土師（７世紀後半）、灰釉陶器（９世紀[illegible]）、[illegible]
13次調査	遺構			SD01（古墳時代中期） SB02（６世紀後半～７世紀前半の遺構、[illegible]） SB03（[illegible]） SB04（４～５世紀か、[illegible]） SB05（[illegible]） SB06（[illegible]） SB07（[illegible]、４～６世紀か） SX13（[illegible]）	
	遺物		弥生土器	須恵器、土師器、[illegible]	瓦、須恵器、土師器

尾張元興寺跡では本調査の前までに14ヶ所で調査がおこなわれている。各調査の詳細については表1にまとめる。それらの概略をまとめると、寺院が建立されたと考えられる奈良時代以前の古墳時代の遺構として、2、5、8、10次調査とバスコによる調査で住居址や2、6、9次調査で比較的規模の大きな溝を確認している。溝は瓦を含まず、寺院が建立される直前に一気に埋められているようである。

図3　既往の調査地点（S＝1／5000）

伽藍に関わる遺構は現在まで確認されていない。しかし、各調査で大量の古代の瓦や、本調査地点のすぐ西側に位置する7次調査では水煙の一部が地山に突き刺さった状況で出土している。

また、近世には元興寺や泰雲寺の境内に関わると考えられる遺構や遺物も多く確認されている。特に、8次調査では埋弁施設と考えられる遺構を多く確認している。

小字	遺構	遺物
	SA01（芝、黒砂部、工場跡、未確認遺構、埋弁施設遺構等）　SA02	
上芝町、中町南	遺構無し	
北芝		
発掘調査の手順、印刷用小道		
	遺構無し、SK01	
	土坑	
	SK02	須恵器
SE01、記念碑（「元興寺址」の石碑の西側）		
神明宮		
SD01、SX02（「芝」まで）、小北川		
印刷用、芝南下		
SK01（下段部分がオーバーハング、形成元の可能性、中世～近世遺構） P1(6)（下段部分がオーバーハング、SX02と同時期及び同元構造、古墳？ 10世紀） SE07～07（井戸は東から1/3は南側、中世～元末の遺構） SE08（中世遺、西南北元興の区画、成果、調査品なし、南北方向の性はは不明、中世～近世遺物、1号石垣の東の端？）	SK01（10～20 元末～江戸時代に埋没された可能か） SK04（10～14 中世遺構） SK05は土器埋納遺構か 建物群（掘立柱建物、江戸時代以降） 埋弁および（下段部分の南端又は一部まで）埋弁施設	
印刷用、芝南	埋弁・埋弁・掘立柱列（10～11・無所・芝南・竹ノ内・芝南・小、建物）	陶器類
SK03	埋弁施設本体（7～8）、埋弁に伴う柱の中間柱？ 埋弁施設基礎（P160・163～165・167・170～172・184、掘立柱列や建物の柱穴か） 埋弁施設に伴う（P162・165、3 柱のの柱穴かもしれない） SP04、SP05、SD01、SD02	
北芝南、東海大附	人物、東北遺跡、東海、芝下、北大坂、印刷小道、地形分析、あくろ遺跡上層、東、関東口、大ノ下石、五重塔遺跡	
北小路	SD03、P10（建物を囲む溝か）	
SE03（地下式壁）	芝北 9、7、5、6、8、9、10、11、12、13、14、17、18、20、21、23、25、27、28（芝南部全域検出中に、埋弁に伴う地下式、あるいは地下式壁？ 古墳？ 6C、6C）	須恵器
中世遺物、11号溝、竪穴、三輪神社、芝南	竪穴住居、SE1号井	大和民間遺跡
SX01（下段部がオーバーハング、14世紀代に遺構か、地下式壁か） SX11（中世期の溝幅が15メートルの遺構か、遺構は西側遺構と同時期か）	SE07、SE07（3基遺構本一対遺構） SE11（10世紀か） SE19（10世紀後半～10世紀） SE20（10世紀後半か） SK03（12世紀後半～13世紀か） SK05、SK07、SK08、SK09（地下式遺か） SK09（17世紀後半か、地下式遺か） 東南部方形遺構	SK08（地下式遺）
芝南、芝南下、芝南、上野遺跡本部、埋弁遺、芝南小	竪穴住居、段状口	
	SD01、SD02、SD03、SD04（P4 ～ P7）、SD05、SD06、SD07、SD08、SD09、SD10、SD24、SD26、SD29、SD31	SD09、SD04
印刷用		芝南遺跡、芝、南南部
SX08 SX27（10世紀後半以降、溝幅の推移の可能性）	SE09 SE08（段状土器集中）	
印刷用、芝南下、芝新	埋弁施設群	

Ⅳ　調査に至る経緯と調査の経過

i　調査に至る経緯

調査地周辺は尾張元興寺跡として既知の埋蔵文化財包蔵地として周知されている。周辺の調査においても瓦や水煙の一部など寺院に関わる遺物を中心に成果が積み上げられてきている。そのような状況の中で本調査地点において倉庫建設工事の届け出が市教育委員

会文化財保護室に提出された。文化財保護室において試掘調査をおこなった結果、遺構の残存が確認されたため、事前に調査を実施し、記録をおこなうこととなった。本調査地点は水槽の一部が見つかった第7次調査地点のすぐ東側にあたり、塔に関連のある遺構や遺物の確認も期待された。

ii　調査の経過

調査地点は2m×30mほどの東西に細長い敷地であり、排土置場の関係から西区・中区・東区の3回に分けて調査をおこなった。西区から着手し、表土掘削を始めると包含層はほとんど見られず、すぐに地山である熱田層の上面を検出した。調査区の南部は既存のビル建設工事の際に攪乱を受けている部分が多く見られた。調査は2008年4月7日に着手し、同年5月2日までにすべての作業を完了し撤収作業をおこなった。

調査日誌抄

4月7日（月）晴、調査開始、西区の表土機械掘削
4月8日（火）晴、西区、表土機械掘削
4月9日（水）晴、西区、包含層掘削
4月11日（金）晴、西区、遺構検出
4月14日（月）晴、西区、遺構仕上げ、図面作成
4月15日（火）晴、西区、遺構仕上げ、清掃、全景写真撮影
4月16日（水）晴、中央区、遺構仕上げ
4月21日（月）晴、中央区、遺構仕上げ、清掃、全景写真撮影
4月22日（火）晴、東区、表土機械掘削
4月23日（水）晴、東区、包含層掘削
4月25日（金）晴、東区、遺構検出、遺構仕上げ
4月28日（月）晴、東区、遺構仕上げ
4月29日（火）晴、東区、遺構仕上げ
4月30日（水）晴、東区、遺構仕上げ、清掃、全景写真撮影
5月1日（木）晴、東区、図面作成、個別遺構写真撮影

V　調査の成果

調査地点付近は明治時代の地籍図によれば、国巻山元興寺の敷地と道路を挟んですぐ東側に位置し、宅地として利用されていたようである。調査開始前は奥にプレハブ状の資材庫があり、道路に近い間口側は駐車場として使われていた。地表面は舗装がされており、それらが取り除かれた状態から調査に着手をした。

i　基本層序

本調査では隣地との関係上壁面に矢板を打ちながら掘削をおこなったため、壁面の観察ができたのは東壁のみであった。東壁付近の基本的な堆積は、舗装とパラスの下に近代以降の整地層と考えられる淡茶褐色の砂質シルト層（1層）が、その下にはSK13としたやはり近代以降の整地層と考えられる褐色のシルト質粘土層（2層）が堆積をし、その下位で地山である熱田層を検出した。2層上面からは近代以降の掘り込みであるSK10・11などの土坑が見られた。

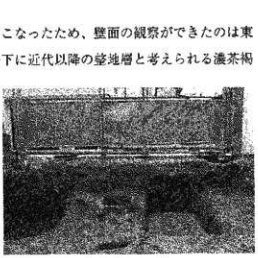


図4　調査区東壁（西から）

調査区全体では、このように近代以降の整地層ですら検出される部分は少なく、大部分は30cmほどのガラを含む

表土層を取り除くと、包含層や整地層は見られず、地山上面を検出するような状況であった。

ii　遺構と遺物

本調査地点では近代以降の攪乱が多く、包含層も残されていなかった。遺構の検出は表土を除去した後の地山面で行ったが、特に西端では遺構がはっきりせず、染込みとの判別が困難であった。遺構として検出し掘削を行ったが、遺物が出土していない遺構もある。遺構の時期としては古代瓦からなる瓦だまりや近世の遺物を含む遺構がみられた。また、古代以前に関しては弥生末から古墳時代初頭にかけての土器など（37、39）は出土したが、この時期に属する遺構は確認されなかった。古代に属すると考えられる遺構は瓦だまりのみである。瓦だまりは調査区中央付近のSK１と東よりのSK24・SK27を検出した。

SK１は最上層で近世以降の遺物を含むが、下層は古代瓦を中心とした古代の遺物のみが出土する遺構である。遺物としては瓦が大半を占め、その他の遺物はほとんどみられない。SK１から出土した瓦の中には29や33のように凸面に横方向のケズリ調整を施されたものがある。

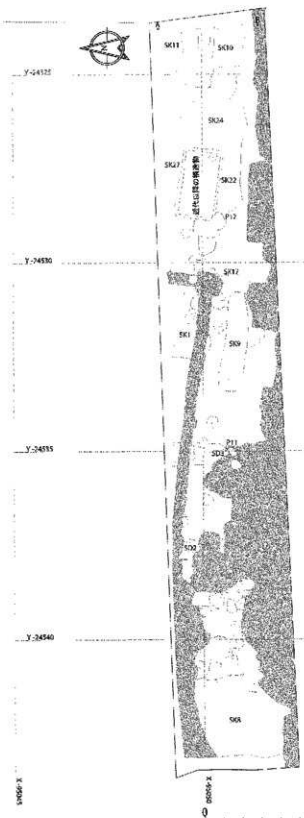
SK24とSK27は別遺構名を付しているが、同一遺構である。また、すぐ脇のSK22も主体となる遺物は古代瓦であるが、少量の近世以降の陶磁器を含む。これは瓦だまりであるSK22を後世に掘り抜いて、その後時間をほとんどおかず再度埋め戻されたためであると考えられる。中央辺りを掘り抜いて近代以降の構造物がつくられている。SK24・SK27ともに出土遺物は瓦が大半を占めるが、須恵器などの遺物もごく少量含まれる。SK24からは軒平瓦１点、軒丸瓦２点が出土している。軒平瓦の瓦当文様は簾状押し挽き五重弧紋である。軒丸瓦に関してはどちらも文様部分が剥離しており不明であるが、外縁は重圏を巡らせ広くなっており、尾張元興寺跡で出土する山田寺式の瓦であると考えられる。４、５はどちらも器種不明の遺物である。４は燻しはないが、燻しのない瓦と同じような焼きである。５は燻しが残っており瓦質の遺物である。SK24から出土した瓦には凸面に横方向のケズリがなされたもの（６、11、14、17、21、22、27）やタタキをナデ消したもの（７、８、９）、凹面をナデ調整したもの（８、16、17、19、21）がみられる。

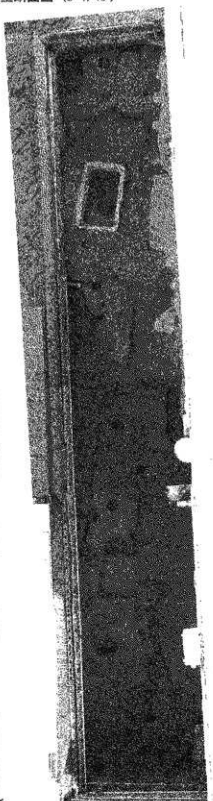
その他の多くの遺構は古代瓦を含むものの近世以降の遺物も出土しており、全体の遺構の時期としては近世以降のものが多い。SK９は第10小期の瀬戸美濃製品を含む遺構であり、佐屋街道沿いの町屋か泰雲寺や元興寺に関わる遺物であると考えられる。

48、49、50は用途不明の棒状の遺物である。図示した以外にも同様の遺物が端部で８点ほど出土している。接合し復元できた中で最大のものは50であり、全長が21.3cm以上である。断面は一辺3.5～４cmの方形で四隅は面取がなされ、どれも被熱をしている。瓦だまりにはみられず、古代瓦を含む近世以降の遺構から出土していることから近世以降の遺物の可能性が高い。用途は不明であるが、被熱していることから窯道具の可能性も考えられる。

SK24、SK27を掘り抜く近代以降の構造物は、枠をコンクリートでつくりその内側を漆喰状のもので補強をしている。南東隅付近には縦方向の円形の窪みがあり、底部分は受け状につくられている。当初防空壕かと考えたが、このような作りの防空壕は例がなく内部の作りも非常に丁寧なことから、防空壕以外の用途が想定される。

調査区東壁断面図（S=1/40）





調査区遺構平面図（S=1/100）
調査区全景写真

図５　調査区遺構平面図（Ｓ＝１／100）調査区全景写真　調査区東壁断面図（Ｓ＝１／40）

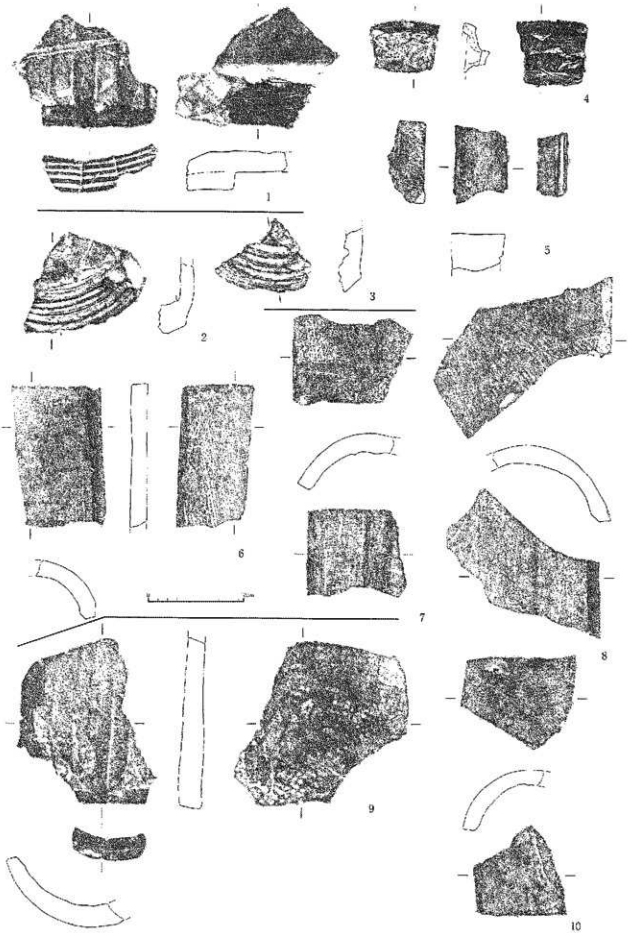


図6　出土遺物実測図1

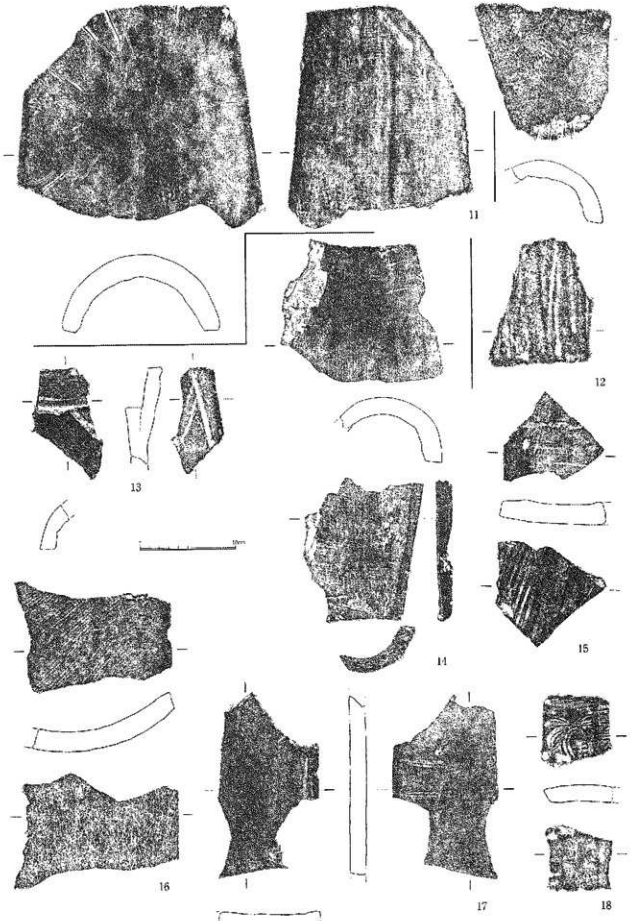


図7　出土遺物実測図2

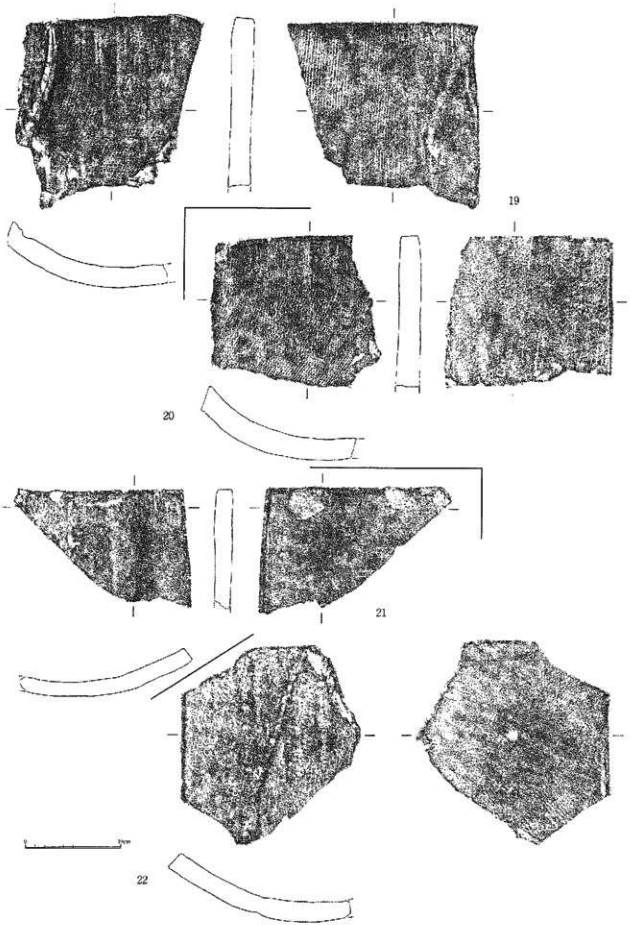


図8　出土遺物実測図3

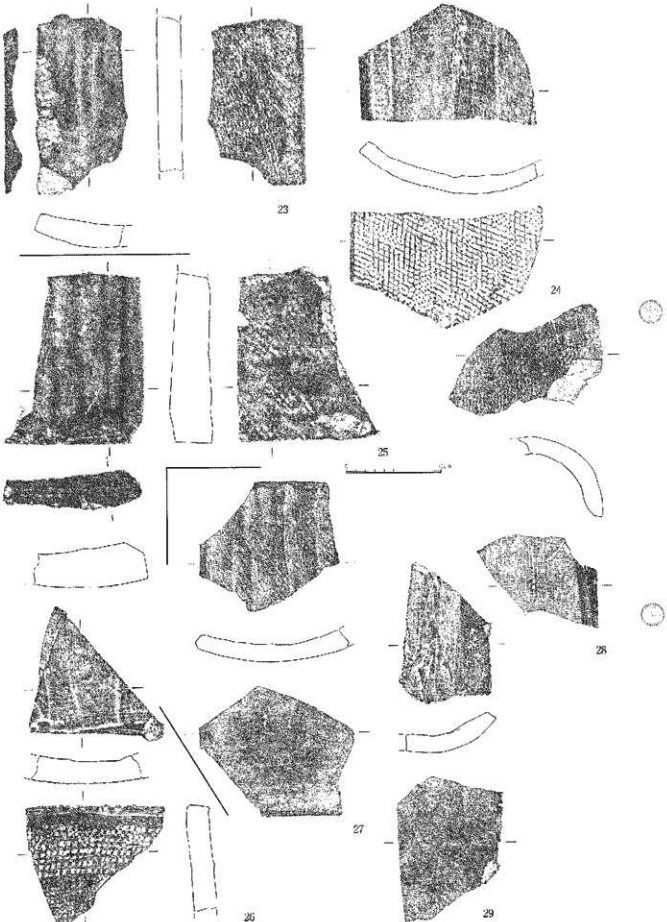


図9　出土遺物実測図4

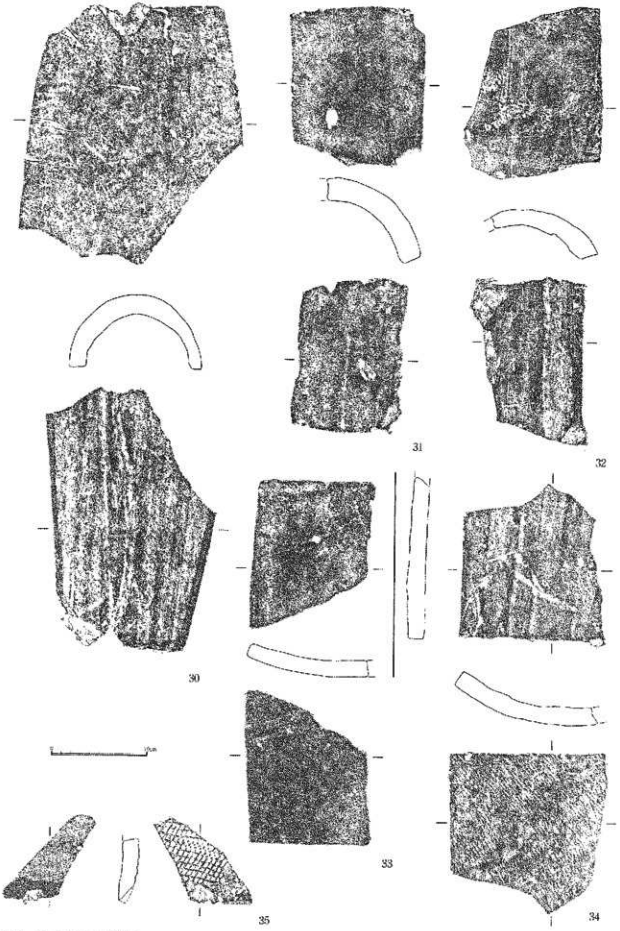


図10　出土遺物実測図 5

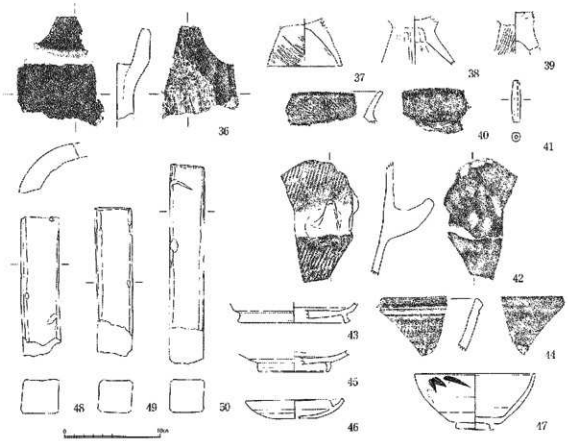


図11　出土遺物実測図６

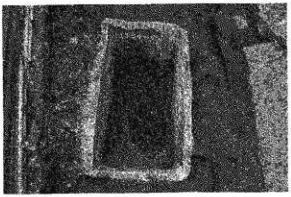


図12　近代以降の構築物（上が東）

図13　SK27（東から）

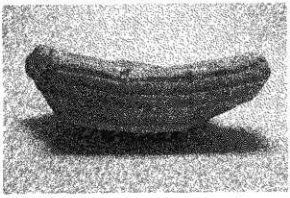


図14　SK24出土軒平瓦（実測図番号１）

図15　SK24出土軒丸瓦（実測図番号２、３）

表2　遺物観察表

図版No.	遺構名	種類・器種名	出土位置	出土層	残存	焼土	炭化	色調 外面	色調 内面	黒斑	備考
1	SK22	縄文系	ナデ	覆土	42mm	やや密	やや軟	灰黄	にぶい黄		胴部33mm、頸部19mm。胴部頂部まではヘラケズリ。頸部以下は縦位方向ミガキ。口縁部は欠損。
2	SK24	縄文系			32mm	やや粗	やや軟	灰黄	灰白		外径16.7cm、外径高18cm、外径は上底部。外面部より内側は剥離しており不明。胴部は欠損していたため記述不明。口縁部ヨコ
3	SK24	縄文系			24mm	やや粗	やや軟	灰黄～黄灰	灰黄		外径8.6cm、外径高3cm。外面は上底部。外縁部より内側は剥離しており不明。胴部は不明。底部はナデ。山形ヨコ
4	SK24	小型			18mm	やや密	やや軟	灰白～黄褐色	灰白～黄褐色		胴部不明。底部方向ナデ。
5	SK24	小型				やや粗	良好	灰白	灰白～灰	○	台部不明。　口縁ヨコ方向のケズリ
6	SK24（SK22とより）	丸底	横方向のケズリ	覆土～ナデ	19mm	やや粗	良好	浅黄～灰白	灰白～にぶい黄褐		口縁部直ともに横方向に面取り
7	SK24	丸底	縦タタキ～ナデ消し	覆土	22mm	やや粗	良好	灰黄～灰白	褐色～浅黄橙		胴部横方向に面取り
8	SK24	丸底	縦タタキ・タタキ消し	表面	20mm	密	良好	灰白	灰白		胴部横方向に面取り
9	SK24	平底	縦手タタキ～ナデ消し	覆土	24mm	密	良好	褐色～黄	褐色～黄		胴部横方向に面取り。輪積作り
10	SK24	丸底		横底	17mm	粗	やや軟	灰白～灰	灰白	○	口縁部のため横方向に面取り。底部は面に面取り
11	SK24	丸底	横方向のケズリ	覆土	26mm	やや密	やや軟	灰白～にぶい黄橙	褐色～褐色		胴部直ともに横方向に面取り
12	SK24	丸底			32mm	やや粗	軟	褐色～灰黄褐	灰白～褐色		口縁のため横方向に面取り
13	SK24（SK22とより）	丸底	横方向のナデ	覆土・裏面	32mm	やや粗	良好	黄灰～褐色	灰白～褐灰	○	底部
14	SK24	丸底	縦タタキ～横方向のケズリ	覆土	21mm	密	良好	灰白	灰白		胴部には有の縦位合わせの痕跡。底部にハナレ跡
15	SK24	平底	平行タタキ	表面	25mm	やや密	良好	灰白～灰	灰白	○	胴部横部にケズリ
16	SK24	平底	ハナレ跡	覆土～縦の方向のナデ	23mm	やや粗	良好	灰～褐灰	灰白～灰	○	
17	SK24	平底	横方向のケズリ	覆土～ナデ	18mm	やや粗	良好	灰白～浅黄	浅黄～浅黄橙		胴部に面取り。輪積作り
18	SK24	平底	横手成	表面	26mm	やや密	やや軟	浅黄橙	浅黄橙		
19	SK24	平底	縦タタキ・ハナレ跡	平行タタキ～ナデ	35mm	やや粗	良好	灰白～灰	灰白～灰	○	胴部横部か。
20	SK24	平底	縦タタキ・ハナレ跡	覆土	26mm	やや粗	良好	灰白～灰	灰白～灰	○	胴部横部に底面
21	SK24	平底	横方向のケズリ	覆土～ナデ	20mm	やや粗	やや軟	灰白～褐色	灰白～褐色		胴部横部に面取り。輪積作り
22	SK24	平底	横方向のケズリ	表面	22mm	やや密	やや軟	灰白	灰白		胴部には有の縦位合わせの痕跡。底部横部にて灰白～底面
23	SK24	平底	縦タタキ	表面・ヘラケズリ	27mm	密	良好	褐色	灰白		底部横部に面取り。輪積作り
24	SK24	平底	縦手タタキ	覆土	19mm	やや粗	良好	褐色～灰	褐色～褐灰		底部には有の縦位合わせの痕跡。下部底部に面取り。輪積作り
25	SK24	平底	縦手タタキ	表面	34mm	密	軟	褐色～黄	褐色		胴部・底部はヘラケズリ。輪積作り
26	SK24	平底	縦タタキ	覆土	27mm	やや粗	良好	灰黄	褐色～黄褐		胴部横部ナデ。輪積作り
27	SK24	平底	横方向のケズリ	表面	22mm	密	良好	灰黄	灰白		胴部直ともに横部に面取り。輪積作り
28	SK1	丸底	縦タタキ～ナデ	表面	31mm	密	良好	褐色～灰黄褐	灰白～にぶい灰褐		胴部に面取り。
29	SK1	平底	横方向のケズリ	表面・ヘラケズリ	22mm	やや密	良好	灰白～灰	灰白		輪積作り
30	SK1	丸底		表面	33mm	密	やや軟	灰白	灰白		口縁部のため横部不明。胴部には有の縦位合わせの痕跡。胴部横部に面取り
31	SK1	丸底		海月	26mm	密	軟	灰黄褐	褐色		石膏部のため横部不明
32	SK1	丸底	縦手タタキ～横方向のケズリ～ナデ	表面	25mm	密	良好	灰白	灰白～にぶい灰褐		胴部に面取り。
33	SK1	平底	横方向のケズリ	表面	18mm	密	軟	灰白～褐色	灰黄褐		輪積作り
34	SK1	平底	縦タタキ	表面	21mm	やや粗	やや軟	褐色	灰白～灰褐		輪積作り
35	P17	平底	縦タタキ	表面	36mm	やや粗	軟	褐色	褐		内面平滑ナモ。輪部に面取り。輪積作り
36	SK10	丸底	横方向のケズリ	ナデ？	33mm	低	良好	褐灰～黒	灰白～灰	○	土器
37	SK1	台付壺				やや粗	良好	にぶい黄橙～灰白			内面ハケメ。外面赤色。粘土接合～指頭押圧痕跡
38	SK1	高杯または台付壺				粗	やや良好	褐			底部のため調整不明。底径高3.2cm。底部内部
39	SK22	器形				密	良好	褐色	褐色		内面ナデ。外面ミガキ。口縁部ヨコナデ。胴部不明
40	P11	土師器				やや密	良好	にぶい黄～黒褐			内面ナデ。外面ハケ。口縁部ヨコナデ。胴部不明
41	掘ハウ	土師器				密	良好	褐～灰白			口径9.8cm、最大高9.9cm、底径3.6cm
42	SK24	須恵器蓋				密	やや密	灰白			外面ヨコナデ。内面ナデ。内側は凹凸
43	SK1	須恵器杯				密	良好	灰黄			内外面横転ナデ。底径13cm。残存高2.2cm
44	SK24	須恵器杯				密	良好	灰			外面ヨコナデ。内面ナデ。内面横位ナデ。
45	掘出中	須恵器器台				やや密	良好	灰			底部ナデ。立面台。底面端部ナデ。残存高7.8cm。残存高2.3cm
46	SK9	須恵器器台脚部（須恵器杯）				密	良好	暗灰褐色			口径15.6cm。器高5.2cm。端部欠損部分小さ
47	SK9	須恵器器台脚部（須恵器杯）				粗	やや軟				器形はケズリナデ。底部に面り出し部分。口径15cm。器高6.1cm。端部欠損部分小さ
48	SK9	不明				やや密	良好	灰白～褐色	灰白～褐		残存長3.6cm。幅3.7cm×4cmの方形。底面は面取りされ。輪積
49	掘出中	不明				やや密	良好	灰白～灰黄	褐色～にぶい褐		残存長3.6cm。幅3.5cm×3.7cmの方形。胴部は面取りされ。輪積
50	SK17	不明				やや密	良好	灰白～灰黄褐	褐色～にぶい黄褐		残存長3.7cm。幅3.5cm×3.2cmの方形。胴部は面取りされ。輪積

Ⅵ　小結

出土遺物の大半を占めるのは瓦だまりから出土した古代瓦である。軒瓦は軒平１点、軒丸２点であった。軒丸瓦は瓦当面が剥離し文様は不明であるが、その他の特徴から山田寺式の瓦であると考えられる。今回全体のカウントをおこなっていないため、凸面の各調整の比率は出せていないが印象としては丸はタタキ消しているものが多そうである。瓦は大きな破片が多く、廃棄後の二次的な移動はないとみられる。

本調査では、これまでの調査と同様、寺院に関わる遺構は確認されず、寺院に関わる遺構としては瓦だまりを検出したのみであった。また、寺院建立以前に遡ると考えられる遺構も今回は検出されず、近代以降の攪乱が多くみられた。その一方で遺物としては、ごく少量ではあるが弥生時代末から古墳時代初頭にかけての土器、尾張元興寺に関わると考えられる古代瓦や須恵器、近世の陶磁器類などが出土しており、現在は失われてしまっているが、それぞれの時期の遺構が存在していた可能性をうかがわせる。これらの遺物の傾向は、本調査では中世の遺物がほとんどみられないこと以外は、これまでの尾張元興寺跡で行われてきた調査の成果と同様なものである。中世の遺物がみられないのは、近世の開発や近代以降の攪乱等による影響が大きいと思われるが慎重な検討が必要である。近世以降に関しては泰宗寺や元興寺といった寺院や佐屋街道沿いの町屋などに関わる遺構・遺物であると考えられる。

今回の調査は非常に小規模なものであったが、その成果は中世が希薄というやや異なる部分はあるものの、全体としては尾張元興寺跡で確認されている傾向を追認するものであった。

報告書抄録

ふりがな	おわりがんごうじあとだいじゅうさんじはっくつちょうさほうこくしょ
書名	尾張元興寺跡第13次発掘調査報告書
副書名	
巻一次	
シリーズ名	
シリーズ巻号	
編著者名	山澤泰祥
編集機関	名古屋市見晴台考古資料館
所在地	〒457-0006　名古屋市南区見晴町47　TEL：052-823-3200　FAX：052-823-3223
発行機関	名古屋市教育委員会
所在地	〒460-8508　名古屋市中区三の丸三丁目１番１号　TEL：052-972-3268　FAX：052-972-4178
発行年月日	2009年３月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 ° ′ ″	東経 ° ′ ″	調査期間	調査面積㎡	調査原因
おわりがんごうじあとだいじゅうさんじはっくつちょうさ 尾張元興寺跡	なごやしみなみくみなみまち 名古屋市南区見晴町 ちょう 丁目1007番の一部	23100	市：7-22 県：7022	35° 08′ 34″	136° 53′ 50″	2008.4.7 ～ 2008.5.2	65㎡	倉庫建設工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
尾張元興寺跡	寺院跡	奈良～中世	瓦だまり	古代の瓦	第13次

要約	本調査地点ではこれまでおこなわれてきた調査同様伽藍に関わる遺構は検出されなかった。包含層も残されておらず、表土を除去するとすぐに地山であった。攪乱も多く、遺物も明確なものは多くはなかったが、瓦だまりを２ヶ所で確認した。また、近代以降の防空壕や地下の収蔵スペースと思われる構造物を検出した。出土した此は軒瓦は３点ほどであり、多くは平瓦や丸瓦の破片であった。大きな破片も含まれており、二次移動はないと考えられる。

尾張元興寺跡第13次発掘調査報告書
2009年３月31日

編集　名古屋市見晴台考古資料館
　　名古屋市南区見晴町47
　　TEL：052-823-3200　FAX：052-823-3223
発行　名古屋市教育委員会
　　名古屋市中区三の丸三丁目１番１号
　　TEL：052-972-3268　FAX：052-972-4178
印刷　西濃印刷株式会社